

フリートーク概要

森本さん：AIR-G' パーソナリティの森本です。

和田さん：株式会社あるた出版の和田です。

森本さん：本日は、虹と雪のバラード アレンジコンテストのオリエンテーションということで、このコンテストに参加してもらえそうな方がいらっしゃっているので、ぜひ、そのヒントとなるようなお話ができればと考えています。

和田さん：どうぞよろしくお願いいたします。

森本さん：早速、本題に入りますが、まず、この「虹と雪のバラード」という曲。この曲の歌詞やタイトルの雰囲気、世界観は、完全に個人的な意見ですけども、「SEKAI NO OWARI」に似ていますね。

昔の楽曲はダークなものが多かった。ここ最近は、みんなに受けやすい大衆音楽に寄ってきています。そういう意味では、虹と雪のバラードは、今の若い世代の方にも、逆に馴染み深いのかもしれません。

和田さん：1972 年の札幌オリンピック当時、音楽はテレビで知るものでした。

森本さん：今はネットで情報収集する時代。Twitter や YouTube で音楽を知ります。特定のアーティストの音楽を能動的に聞くのではなく、流れてくる・自然と入ってくる音楽を受動的に聞いています。それが今の流行で、曲の良し悪しは二の次になっているところがあります。

和田さん：仕事でオーディオ・CD ショップの人と関わる機会がありますが、みなさん口をそろえて、「今の若い人は音質よりもいろんな場所で手軽に聞けることを求めている」とおっしゃります。

森本さん：今の時代の音楽は、アーティストからクリエイターになりつつあります。今はパソコンの打ち込みやギター一本で簡単に音楽が作れる。そして、SNS を使って簡単に発信で



きる。「こういう曲を作ってみた、歌ってみた」という自己演出でプロデビューしている人もたくさんいる。音楽の発信場所も変わってきていますし。

今回の虹と雪のバラードのアレンジバージョンを、札幌市・北海道として、どのように発信していくか、とても楽しみです。

和田さん：昔は虹と雪のバラードを学校で習いました。アレンジバージョンも、学校で活用できるようなものだと思えます。

森本さん：学校のチャイムは、全員「刷り込み」されていて、鳴った瞬間に全員が「チャイム」だとわかります。札幌市内の小中学校で、虹と雪のバラードがチャイム代わりに流れたら面白いと思います。



和田さん：オリンピックの歴代（報道・大会）テーマソングはみんな結構覚えています。ゆずの「栄光の架橋」を聞くとアテネオリンピックの体操の着地の瞬間。それと同じように、「虹と雪のバラード」を知っている世代の人がこの曲を聞くと、当時の街の風景が強く蘇ります。

大会の雰囲気と曲が強く結びついているのです。「目の記憶」と「耳の記憶」が重なると、記憶は鮮明に残る。例えば、大阪万博の映像がよくテレビで流れるが、その時は必ず太陽の塔が出てきて、三波春夫が歌った「世界の国からこんにちは」が流れます。東京五輪音頭もそう。

森本さん：歌詞の部分は変えられないので、そうすると人を引き付ける要素（フック）の部分をどうするかがカギ。サンプルを聞いて感じたのですが、「冬」は「バラード」、「夏」は「盛り上がる」曲のイメージや固定概念がありますね。

和田さん：雪と氷はバラードの世界観・美しいイメージがあります。

森本さん：ぜひその固定概念を、良い意味で崩してほしい。ただ、ネックなのは、曲のタイトルに「バラード」と入っていることです。もしかしたら提出されるアレンジ音源に、「これバラードじゃないよ」と注文を付ける大人の方がいるかもしれない。しかし、若い世代の方には、敢えて挑戦してほしいです。今、世の中は音楽が飽和している状態。そんな中、「バラード」なのに「バラード」じゃないというのは、ある意味、フックだと思います。

和田さん：1972 年札幌オリンピックで街は大きく変わりました。人口が 100 万人に到達し、地下鉄や高速道路もできました。行政だけではなく、民間でも様々な取組が行なわれましたね。ニッカの看板が掲げられたのもこの時。今日と明日で街が違う姿になっていました。まさに、「未来はバラ色だ」という雰囲気でした。

しかし、2030 年大会に向けて、今はそういう雰囲気ではない。必ずしも明るい雰囲気ではない。72 年大会の時のように、毎日ビルが建てられるようなまちづくりではない。

72 年大会の「アゲアゲ」だった時代の歌詞を使って、今の時代の札幌にどんな願いを込めるかということが重要になると思います。

森本さん：すごいプレッシャー感じましたね、アレンジする側に立つと。でも、とても大切なことだと思います。

今、この虹と雪のバラードを聞いていると、僕は若い世代なのですごく新鮮に思えます。聞いたことがある方は昔を懐かしむ。それと同じように、10 年後、この曲を聞いたとき、「ああ、あの時和田さんとオリエンテーションしたな」と思い出します。今日、初めて聞いた方も多くいると思うが、彼ら彼女らにとってはまさに「今日聞いた曲」という認識。その「新しい曲としての虹と雪のバラード」が、このコンテストから生まれるのかとても楽しみです。

森本さん：2030 年の冬季オリパラ招致に向けて、僕ら市民は何をしたらいいのでしょうか。

和田さん：72 年大会の時には、札幌の多くの市民が、選手や役員、観光客に「YOKOSO」とおもてなしをしました。一人ひとりがオリンピックに参画しているという気持ちを持っていました。2030 年に向けて、市民全体の気持ちを作ることが必要かもしれません。

森本さん：僕は道外出身なので、北海道にきて、この 10 月で 5 年目になりますが、北海道民が「北海道いいよ」と口に出すことができる点が、北海道の魅力の一つだと思います。輪を広げようとする心がある。観光客を案内している姿も見る。和田さんの言うとおりに、おもてなそうとする心がある。この音楽も一つのフックになればいいと思いますね。

さらに、北海道にはたくさんのアーティストもいる。有名な方だけでなく、札幌市民の中にもアーティストはたくさんいるので、そういう人たちとこの曲がどのように結びつくかというのも、僕は楽しみにしています。和田さんも街を歩いていて、ギターを背負った人たちを見たりすることはありますか。

和田さん：たくさん見ます。

森本さん：結構多いです。

和田さん：夜に狸小路などで弾いている人たちがたくさんいます。

森本さん：僕の地元にも狸小路に似ている商店街がありますが、誰もいません。久しぶりに帰っても本当にいなくて、寂しいと思いました。その中で狸小路にあれだけ人がいるというのは、すごいことです。観光客ばかりだと言う人もいるかもしれませんが、まずそこにお店があって、人がいて、音楽も溢れている街というのはなかなかないと僕は思っています。そういう街から何が生まれるのかというのは、楽しみの一つです。

スポーツの文化で言うと、札幌はファイターズをはじめ、コンサドーレやレバンガ、エスポラーダなどプロスポーツチームがとても多いと思います。このような街はなかなかありません。2030 年に向けて、そのとき活躍する人は、まさに今 10 代の子たちかもしれません。和田さんが今思う、2030 年に招致できた場合の楽しみは何ですか。

和田さん：これから街をどう変えていくか、ということをいろいろと考えています。昔のように潤沢な予算をつぎ込んで道路や橋を作るのではなく、「もっと人に優しい街」をつくりたいと僕は思っています。これから市民の平均年齢はどんどん上がります。もし、外出するのに大きなストレスを感じて、大変でかなわなくなったら、これからの時代はみんなネットで買い物をします。お年寄りもネットのスキルのある世代になっていきます。みんなネットで買い物をし始めると、街の中でお金が回らないので、街は死んでしまいます。みんなが外出をして、楽しく街を歩いて、楽しく買い物できる。だから、外出にストレスがなくて、楽しくて、わかりやすい。観光客もそうです。これをきっかけに、そういう街にしていきたいと思います。

森本さん：今の言葉はとてもキーワードになります。和田さんがおっしゃっていたのは、外出など、わくわくする、街に出かけたくなるような音楽というのが、ここに含まれたら面白くなりそうですね。

和田さん：なると思います。

森本さん：先ほど僕が言った、バラードという固定概念にとらわれないものが出てきそうな気がします。

スポーツ文化で言うと、今はもうテレビの設定で、選手が自分の目の前に立っている、バッテリーボックスにいるような試合を

VR で見ることができるという、恐ろしい時代だと僕は思っています。それで満足せずに、



その場の空気や音など、やはりスポーツは生で観たほうが面白いと僕は思っています。そういうふうになっていくと、2030年のこの招致ももっと面白くなっていくと思います。

和田さん：もし今度オリンピックをやることになったら、人を一生懸命育てる環境を作りたいですね。

森本さん：人というのは？

和田さん：例えばマイナー競技も含めて、選手を育成していく環境や人ということです。もちろん、前回のオリンピックでもいろいろな施設を作りましたが、例えばリュージュやボブスレーなど、どうしても競技人口が少なく、施設も老朽化している所があります。今度またオリンピックをするとしたら、そのような施設も整備することになります。それをきっかけに選手を育てる仕組みが札幌の街にできると、例えばオリンピックが終わった後も、世界の有名選手や、オリンピック出場を目指す日本の子どもたちが青春時代を札幌で過ごすわけです。そういう世界のウィンタースポーツの聖地になったら、すごく素敵だと思います。

森本さん：確かにプロスポーツ選手でも、海外へ練習しに行く方が多いです。フィギュアスケートや、スキージャンプもそうです。そういう環境が北海道にできれば。

和田さん：そうです。人が育てば、そのマイナー競技の施設も無駄になりません。

森本さん：確かにそうです。先ほど和田さんは、街は変わっていくものとおっしゃっていました。札幌市の街並みがこれ以上どう変わるのかというのは、僕には想像できない世界です。人工物として変えるべきものと、変わるべきものというのがそれぞれあると思います。和田さんは、それぞれどのように思いますか。街を見ていて、変えなければいけないと思っていることと、変わったほうがいいと思うことはありますか。

和田さん：いろいろな考え方がありますが、僕は具体的に考えていることがあります。例えば交通の標識や人の動線など、改善の余地はいろいろとあると思います。全部細かいところですが、それを札幌の街全体で積み重ねれば、札幌はとて素晴らしい街になると思います。地下鉄の路線を伸ばさなくても、とて素晴らしい街にできると思います。例えばバスの乗り場をわかりやすくするとか、地下鉄への乗り方も、回り道していたのを一直線にするとか、そういう細かいことを改善するだけで、とて素晴らしい街になると思います。

森本さん：さっきおっしゃっていた、外に行きたくなるような街ということですね。今回はこの「虹と雪のバラード」のアレンジコンテストということで、僕らはお招きいただきまし

た。改めて和田さんのほうから、和田さんの観点でいいので、今回のアレンジコンテストは
どういうところがポイントだと思われるか教えてください。

和田さん：この 46 年前の歌詞にどんな気持ちを込めるかというのを、若い作り手たちがど
んな思いを込めるかというのを聞いてみたいです。

森本さん：なるほど。「君の名を呼ぶ」という歌詞もあります。

和田さん：街ができるとか、生まれ変わるというところにどんな思いを込めるかというのが
伝わってくると、面白いと思います。

森本さん：その辺りがどう音楽として、メロディーとして表現されるのかというのが非常に
楽しみです。

というような感じで膨らませてもらいましたが、少しでも何か発想の鍵の一つになれば
いいなと思います。和田さんは街を見ていらっしゃる方なので、僕らとは違う観点で、さっ
きおっしゃった「外に出やすくなる街」と
いうのは新しい発見だなと思いました。
皆さんの中でも、この「虹と雪のバラード」に「外に行く」という要素を、「生で
観る、生で聞く」というような要素を加え
ていただければと思いますし、それがき
っとそれぞれの観点だと思います。僕ら
も楽しみにしております。



和田さん：もう、素敵な曲がたくさん来ています。

森本さん：以上です。ありがとうございました。

和田さん：ありがとうございました。